

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

「Y日記」から見たサンパウロ州の日系農業小生産者の生産と生活(6) プルデンテ市近傍の日系農業小生産者の二次的集団地「ミネのムラ」の社会経済的性格

著者	西川 大二郎
出版者	法政大学教養部
雑誌名	法政大学教養部紀要．社会科学編
巻	102
ページ	79-102
発行年	1997-02
URL	http://hdl.handle.net/10114/3700

「Y 日記」から見たサンパウロ州の日系農業 小生産者の生産と生活 (6)

—ブルデンテ市近傍の日系農業小生産者の
二次的集団地「ミネのムラ」の社会経済的性格—

西 川 大二郎

目 次

I. まえがき—問題の所在—

II. 「ミネのムラ」の経済的性格の概略

- (1) 日系農業小生産者集団地の形成
- (2) 「ムラ」の人口構成
- (3) 「ムラ」の構成員の土地所有規模と農業経営類型

III. 「Y 日記」から見た日系農業小生産者の生産と生活の様態

- (1) Y 氏の生活史
- (2) 「Y 日記」の小さな解説
- (3) 「Y 日記」記入費目の吟味
- (4) 「Y 日記」の分析のための費目の分類
- (5) 全費目についての分類、整理の結果
- (6) 農業生産について
- (7) 家計支出について

IV. 「ミネのムラ」の生活様式と社会経済的特性

- (1) 構成員の出身地
- (2) 婚姻関係
- (3) 雇用関係に見られる「外人」観—人種、民族問題—
- (4) 「日本語」学校教育
- (5) 宗教生活
- (6) 文化生活 (以上前号)

承前

- (7) 生活圏 (本 号)
- (8) 社会集団の特性 (「ミネのムラ」の人間関係)
 - ① 「ミネのムラ」に定着するまでの人間関係
 - ② 「ミネのムラ」での初期の社会的相互扶助関係 (以下次号)

V. 結 び

承 前

(7) 生活圏—「Y 日記」から見た Y 家族の生活圏の構造—

① 「Y 日記」の支出費目と生活圏

Y 家の成員の生活領域を考察するために、「Y 日記」の支出費目の整理を見直してみよう。

支出費目は、賃金支出・生産材購入費・食料費・日用品・住居費・光熱費・保健衛生費・教育費・書籍及び雑誌代・交通費・娯楽費・寄付・旅費・祝儀・法事・その他租税等に分類した。（「Y 日記」から見たサンパウロ州の日系農業小生産者の生産と生活(1)」『法政大学教養部紀要』79 号、1991、pp.21-22）

賃金支出はカマラダへの賃金の支払いで、それには空間的移動は特に必要ではない。しかしそれ以外の支出には多かれ少なかれ空間的行動が伴うであろう。

農具・肥料・農薬・種子・農産物等の生産資材・生産物の購入・運搬はもちろんのこと、土地購入に当たっても、土地購入費・地代・土地登記費用の支払いのためには、登記所へ通うなど、空間的移動が必要である。

生活にかかわる支出に当たる食料品・日用品の支出はもちろんのこと、光熱は石油等燃料の購入を必要とし、保健衛生費は病院通い・薬品購入費支払い、理髪・按摩通いなどの移動を伴う。教育費の支払いは必ずしも空間移動を伴うとはいえないが、書籍の購入、新聞・雑誌の購入を考えると、その購入と支払いが、いかなる商店、機関を通じて行われるかによって、空間的行動現象となる。映画・釣・サーカス見物等個人の娯楽（レジャー）の行動は娯楽費に現れ、親戚・友人・知人の見舞・土産・餞別等、交際費の支払いは交際関係とその行動範囲を表す。結婚費用・見合い費等の祝儀、盆の墓参り等の法事、日本人会主催の運動会や弁論大会・相撲大会への寄付金・寺（本願寺）や学校への寄付金等も同様である。旅費の記入は、遠距離長期間の旅行・宿泊費等は、端的に行動領域を表す。

「Y 日記」は支出の記録を主にした内容であるが、しばしば、購入した商店の名前が記入されている。しかし、すべての記録に、購入先・支払先商店名とその所在地が記入されているわけではない。また、場合によっては、記録の初めに、ブルデンテ市へ買い物と記した上で購入商品が一括記入されている。し

かし、多くの記録を整理してみると、商店の種類、その所在地、購入先・支払先の年による変化等が浮かび上がってくる。

空間的行動の目的は多様であるが、ここではおもに生活に必要な食品・日用品を購入するための商店での買い物行動を中心として、Yの家族の生活圏、つまり買物圏を探ってみる。

② ブラジルの都市的集落の起源とそのネットワーク

Yの家族の生活圏を探るまえに、ブラジルにおける都市及び集落の起源とそのネットワークの特性に触れておこう。

まずブラジルの行政組織を上位から下位へと記すと、

República 国家→Estado 州・Distrito Federal 連邦区・Territorio 準州→Município ムニシピオ（郡）→Distrito ディストリット（地区）となる。これらのうち国家・連邦区・準州・ムニシピオはそれらに相当する自治機関である立法・行政の政治機関（Presidente 大統領府と Assembleia Legais 国会, Governador 州知事と Governo 州政府と Assembleia Legais 州議会, Prefeito 市長と Camara de Vereador 市議会）とを所有するが、ディストリットはそれに相当する自治機関を所有していない。

この中で最も生活に近いのはムニシピオ municípios である。ムニシピオは市郡自治行政体のことで、集落の形態によって行政的に都市部 região urbano と農村部 região rural とに分けられる。

ムニシピオ設立の条件は、人口規模・歳入額・市郡政府設立・人口集合する集落の存在を前提とし、住民投票によって決定し、基本的に5年ごとに点検する。

ムニシピオのうち、人口規模や居住人口集団の機能、人口構造、住民の職業活動の非農業的＝都市の状態を指標としてシダージ（行政的都市＝市）cidade とする。したがって、シダージ（市）はムニシピオの一形態である。一般に、都市地域（人口集合地域）における住民5,000人を最低条件とし、それ以下はシダージ（市）とはいわない。

ムニシピオはディストリットに分けられるが、シダージ（市）cidade の都市部の内部はバイロ（街区）bairros に分けられる

ところで、ブラジルの都市的集落は、その起源によって次のように分類される。

デフォンテーヌ, ピエル Deffontaines, Pierre (1938) は次のように分類する。

1. 征服された集落。as reduções (aldeia de índios)
2. 軍事的起源を持つ人口集中 as aglomerações de origem militar
3. 鉱山町 as cidades de mineração
4. 宿場町 os pousos
5. 港町 as cidade de navegação
6. 鉄道駅町 as estações ferroviárias
7. セルトン (内陸奥地) への入り口 as bocas de sertão
8. 教会領パトリモニオ os patrimônios religiosos
9. 普通のパトリモニオ os patrimônios leigos

アゼヴェド, アロルド デ Azevedo, Aroldo de (1970) は次のように分類する。

1. 城砦・軍事拠点 lugares fortificados e postos militares
2. インディオの集落 aldeamentos de índios
3. ガリンペイロ=ダイヤ採りの野営地等の小集落 arraiais e corrute-las
4. エンジェーニョ engenhos やウジーナ usinas, ファゼンダ fazendas 内農村集落
5. 農村地区分譲農地 loteamentos : パトリモニオ patrimônios と開拓植民地 núcleos coloniais
6. 旅行者の宿泊地 pousos de viajantes, 鉄道駅町 estações ferroviárias

いずれにせよ、ブラジルの都市の起源になる集落を上位から階層的に分類して示せば、シダージ (都市) cidades, ヴィラ (まち集落) vilas, ポヴォアード (むら集落) povoados となる。そして、これらがブラジルの都市的集落のネットワークを形成している。ポヴォアードは、ブラジルの都市的集落のネットワーク形成の最も基底的要素であり、上記の分類中にそれを求めれば、エンジェーニョ, ウジーナ, ファゼンダ内の農業者等の居住集落コロニアや、農村地区の農地分譲によって発生した教会中心の集落パトリモニオや開拓植民地である。

ポヴォアードはイギリスのハムレット hamlet とも、フランスのアモーrameau とも、ポルトガルのカザール casal とも違う。それはスペイン領アメリカのプエブロ pueblo に最も近いという。

(Aroldo de Azevedo (1970), Brasil, a terra e o homen II, Univ. de S. Paulo)

③ プレジデンテ・プルデンテ市及びその近傍の都市的集落とその階層的分布状況

上記の都市的集落の分類によれば、つまりシダージ、ヴィラ、ポヴォアードという階層的区分によれば、プレジデンテ・プルデンテ市は、ソロカバーナ線の駅を中心に発展した鉄道駅町に起源を有するシダージであり、それらは独立したムニシピオの中心都市となっている。ソロカバーナ線の沿線には、その後の条件の差によって規模

に違いができたとしても、類似のシダージがある。沿線の先の方には、アルヴァレス・マシャード、プレジデンテ・ベルナルデス、サント・アナスタシオ、プレジデンテ・ベンセスラウがあり、サンパウロ市に近い方には、レジェンテ・フェイジョ、インヂアナ、マルチノポリスのほか、ランシャリア、パラグアス・パウリスタ等がある。

マリリア、トゥパンは、ソロカバーナ線の北方を、ほぼ平行して走るパウリスタ線沿線の同種のシダージである。

第10表 関連ムニシピオとその人口
(1993年市制施行のもの)

ムニシピオ(市)名	人口(万人)	
	1993年	1960年
サンパウロ市	984.2	316.5
ソロカバナ鉄道沿線駅のムニシピオ(市)		
プレジデンテ・プルデンテ	17.0	5.4
アルヴァレス・マシャード	2.0	—
プレジデンテ・ベルナルデス	1.4	—
サント・アナスタシオ	2.2	1.1
プレジデンテ・ベンセスラウ	3.7	1.3
レジェンテ・フェイジョ	1.6	—
インヂアナ	0.5	—
マルチノポリス	2.0	—
ランシャリア	2.7	1.1
パラグアス・パウリスタ	3.6	1.1
パウリスタ鉄道沿線駅のムニシピオ(市)		
マリリア	16.7	5.2
トゥパン	6.2	6.2

注：1960年の人口1万未満のものは—とした。
資料：Anuário Estatístico do Brasil, 1994 & 1963

Yの家族の生活圏に関わる都市ネットワークを構成すると見られるムニシピオの人口（1993年、1960年）を、メトロポリス、サンパウロ市を含めて第10表に示した。（第10表）

シダージの機能を示す都市施設をプレジデンテ・プルデンテ市を例にして見ると、そこには、日用品、食料品、生産諸資材等を商う諸商店のほか、行政の中心としての市役所等、カソリック世界の地域社会の精神的中心の教会、経済中心の銀行、コーヒー精選工場、綿工場、精油工場などの産業施設、鉄道駅、空港、バスセンター等の交通施設、ラジオ放送局等、農学校ほか多くの学校、病院、公営墓地が存在する。

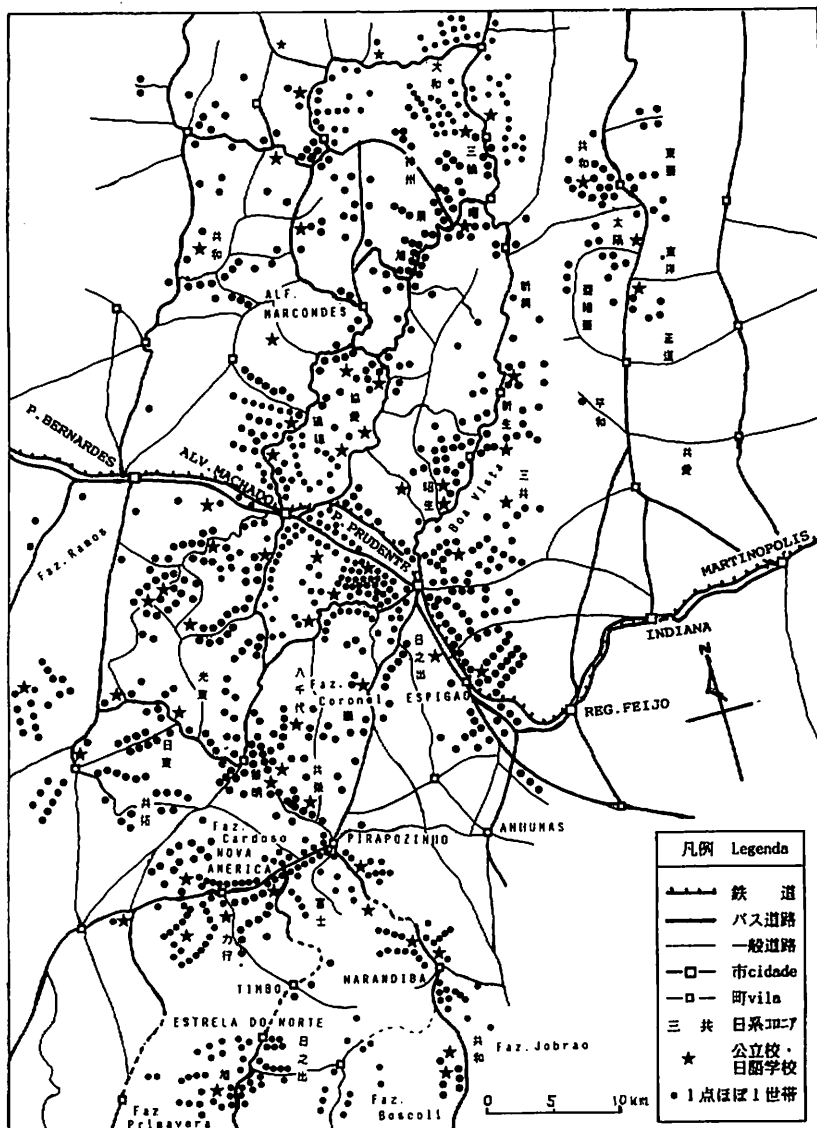
鉄道駅を中心に発達した都市（シダージ）は、鉄道線路沿いに7～8キロから十数キロおきに分布し、それぞれが後背地の農村部を持つ。農村部と中心都市とはもっぱら道路によって結ばれているが、開拓初期から見れば、その交通運輸手段は、徒歩、馬、馬車（カロッサ、シャレッチ）、自動車と変わり、特に第二次世界大戦中からはトラックが用いられ出し、戦後は道路の整備にしたがってバス交通が一般化するようになった。バス交通には、鉄道駅を持つ中心都市と周辺農村部とを結ぶジャルジネイロと呼ばれる近郊バスと、幹線を通じて都市と都市とを結ぶインターシティーのオニブスとがある。インターシティーのオニブスは、サンパウロ市を結ぶ幹線国道の整備によって、特に第二次世界大戦後には鉄道を凌駕するものとなった。そのことによって、都市内の機能中心は鉄道駅周辺からバス中央駅周辺へと移動する現象さえ引き起こしている。

ジャルジネイロのよって結ばれる道路沿いに、数キロから十数キロおきに、小さな中心集落が発生している。それがヴィラである。中心シダージの多くが計画都市の性格を持っているのに対して、この地域のヴィラは、中心都市とを結ぶ交通の小結節点として、周辺農村部の住人の便宜から自然発生的に形成されたものが多い。

これらの関係を理解しやすいように、第3図「プレジデンテ・プルデンテ市地方邦人在住分布図」を作成した。

これはプレフェイトウーラ（市役所）Prefeituraが所蔵していた航空写真を基図とし、それにプレジデンテ・プルデンテ市地方の日本人会所蔵の資料を参考にしながら、著者が作成したものである。したがって、ムニシピオの境界は明確に把握できていないので、記入されていない。（第3図）

第3図 プレジデンテ・プルデンテ市地方邦人居住分布図 (1957年)



資料：プレジデンテ・プルデンテ市所有の航空写真とプルデンテ市地方日本人会資料により筆者作成

④ Y の家族の生活行動圏の地域別傾向と時間的変遷

「Y 日記」から読み取れる Y の家族の生活の行動領域を、上記の都市ネットワークに重ねあわせて表を作ってみた。そしてそれを年次別に整理してみたのが第 11 表である。(第 11 表)

第 11 表 買物等訪問先別訪問頻度から見た Y の家族の生活圏
昭和 20-30 (1945-55) 年

年 (昭和)	20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年	27年	28年	29年	30年	合計
記入回数	100	83	75	60	145	141	162	170	157	179	183	1,455
買物等訪問先と訪問回数												
○地元ヴィラ	71	49	48	28	79	71	78	69	72	63	77	705
□ブ・ブルデンテ市	26	22	22	24	47	62	75	84	67	95	93	617
□アルバレス・マシャド	—	—	—	—	—	—	1	5	1	2	1	10
□ブ・ベルナルデス	—	—	—	—	5	1	—	—	—	—	—	6
□サント・アナスタシオ	—	—	—	—	—	—	—	7	4	1	—	12
□ブ・ベンセスラウ	1	1	—	—	2	—	—	5	5	8	4	26
○レボージオ	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
○モンテアルボン	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	1	5
○アニューマス(前住地)	2	5	3	2	4	3	2	1	3	1	6	32
○シンコムルアルケレ	—	—	—	—	—	1	—	—	3	1	—	5
□インザアナ	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1
□マルチノポリス	3	1	—	1	6	4	1	—	1	—	—	17
□ランチャリア	1	4	2	3	2	—	—	—	—	—	—	12
□パラグアス・パウリスタ	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
◇マリリア	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
◇トゥパン	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
ウジナ(魚釣り)	—	—	—	—	—	1	—	—	—	2	—	3
ペラポ(魚釣り)	—	1	—	—	—	—	—	1	1	1	—	4
ポルト川(魚釣り)	—	—	—	1	—	—	1	—	—	—	—	2
パラナ州(種いも買い)	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	1	3
サンパウロ市行	—	2	—	—	—	—	1	3	2	2	1	11
サントス市行	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1

注：□ ソロカバナ鉄道沿線駅のムニシピオ(市) ◇ パウリスタ鉄道沿線駅のムニシピオ(市)

○ 当時のブ・ブルデンテ周辺のヴィラ

資料：「Y 日記」より筆者作成

Yの家族の行動領域は、「ミネのムラ」農村部内、「ミネのムラ」に近い地元ヴィラ、プレジデンテ・プルデンテ市という当地方の中心的シダージ、メトロポリスのサンパウロ市、及びその他のヴィラとシダージとに大別できる。

記入回数というのは、記入日数といってもよいものである。したがって、記入日の重複もあるので、以下の買い物等訪問先の回数とは必ずしも一致しない。しかし、大筋としての記入量は行動量に比例するものと考えられ、それは徐々に増大している。

行動領域のうち、「ミネのムラ」農村部内の行動は、金銭的支出簿という資料の性質上、この表には現れてこない。

表に現れているかぎりでは、行動領域を読み取ると、買い物・訪問先の大部分は、地元ヴィラとプレジデンテ・プルデンテ市である。その行動目的は、友人・知人の訪問があるとしても、必ず買い物行動を伴うことからすると、主要な目的は日常的な買い物にあるといえる。

この両者に対する頻度のみを比較すると、全体としては、地元ヴィラでの買い物の頻度はほぼ一週間おきで、あまり変化がないが、プレジデンテ・プルデンテ市へでかける頻度は昭和 25 (1950) 年頃から急速に増加し、一週間おき以上になっている。その理由としては、Y の場合自らトラックや自家用の自動車を所有することはなかったが、バスやタクシーなどの公共交通手段が整ってきて、生活施設が多様に整備された都市プレジデンテ・プルデンテ市へのアクセスビリティが容易になったことが挙げられる。それと同時に、Y の所得の向上、生産規模の増大といった経済活動の拡大、生活内容の多様化など、生活に対するニーズの質の変化も、大きい要因として対応した結果といえる。

この2地点についての買い物行動の内容については、改めて分析を進める。

この2地点以外は、大別すると、プレジデンテ・プルデンテ市以外のソロカバナ鉄道沿線のムニシピオ、プレジデンテ・プルデンテ市周辺のヴィラ、大都市サンパウロ市、サントス市、その他となる。

中でもアニューマスへの頻度が高いのは、ここが、Y にとっては、単に前住地であるばかりでなく、結婚した土地でもあり、夫人の親族の居住地でもあるといった、さまざまな人間関係に由来している。マルチノポリス、ランシャリアも親族の家族の訪問である。その他のムニシピオの訪問は、多かれ少なかれ、親族関係、友人・知人関係に由来している。プレジデンテ・プルデンテ市以外のソロカバナ鉄道沿線のムニシピオと書かれたものも、そのムニシピオの

都市的中心での買い物行動ではなく、農村部に居住する親族・友人・知人の訪問である。

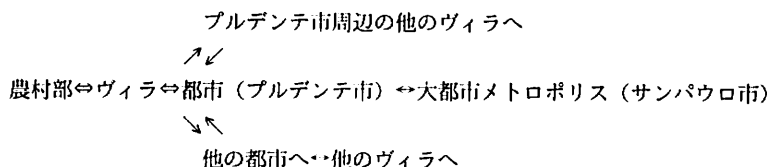
マリリア、トゥバンといったパウリスタ鉄道沿線のムニシピオへの訪問は、日本人社会内の連絡のためとあり、知人訪問という点では同種のもので、時間とともに早期に関係が薄れているのもそのためである。

魚釣り行動は、ブラジルにおける顕著なレジャー行動であり、日本移民の間でも一般にペスカ pesca と呼ばれ、特に開拓前線における顕著なレジャー行動である。記録を見ると、平均すれば一年に一回程度であるが、生活の安定が前提にあり、友人と、または家族と連れ立って、数日にわたって野営しながらの遠出での旅行を楽しむ。

1951年のパラナ州への種いもの買い付けは、ちょうどこの時期に綿作からバタータ（じゃがいも）生産に転換した際に行われたことである。

サンパウロ市への旅行は、昭和21（1946）年は、家族の病気というアクシデントによって、よんどころなく行われたものである。昭和26（1951）年以降に頻繁になるが、それは生活行動圏の拡大と理解して良いものであり、その内容については後述する。

Yの行動空間を都市ネットワークに照して、下のように図示することができる。



⑤ 利用商店の所在地と業種、その利用頻度及び利用頻度の変化

「Y日記」から読み取れるYの家族の生活圏のうち、利用商店から知れる買い物圏を描き出してみよう。

「Y日記」から読み取れたYの家族が利用した商店を、プルデンテ・プルデンテ市内のものと地元の近くのヴィラのものにと大別し、所在地、業種、主な購入品目を、次のとおりに列挙する。

所在地がブレジデンテ・ブルデンテ市内のもの：

a. 旅館*

旅館1 (T D 旅館) 宿泊・食堂

旅館2 (T F 旅館) 宿泊・食堂

b. バール=bar** (bar と表記)

bar 1 (A K 商店) マッチ・ガラナ

bar 2 (W N 商店) 菓子

bar 3 (Y S 商店) 煙草・菓子・コーヒー・ガラナ

bar 4 (S D 商店) 煙草・菓子・コーヒー・ポン・ソルベッテ

c. セッコス・イ・モリヤードス=secos e molhados*** (S.e M. と表記)

S.e M. 1 (Y M 商店) 魚

S.e M. 2 (S J 商店) きびなご

S.e M. 3 (H T 商店) 白米

S.e M. 4 (T D 商店) 食料

S.e M. 5 (Y O 商店) 塩飴・綿資材・白米・食品・わかもと・第二回日本送金手数料

S.e M. 6 (M U 商店) 食品・味の素・餅米・茶・薬

S.e M. 7 (T Y 商店) **** 薬・菓子・魚・食品

S.e M. 8 (H I 商店) ***** 魚・飴・麦粉・マカロン・きびなご・フェイジョン・日本酒・正月物・雑誌

S.e M. 9 (M K 商店) ?

S.e M. 10 (I U 商店) 魚味だし・わかもと・救心・餅米・白米・茶・味素・蜂蜜・素麺・ホヤ

S.e M. 11 (T T 商店) 白米・弱魚・魚・砂糖飴・薪・燐寸 (地元に住居)

S.e M. 12 (M M 商店) 醤油元・魚弱・えび・缶詰・ミシン油・茶・靴・バタタ種

S.e M. 13 (N M 商店) 救心・大豆・ソーダ・菓子 (地元に住居)

S.e M. 14 (G J 商店) ***** 外人商店。セーボ sebo (豚の脂)

S.e M. 15 (K H 商店) 魚・醤油・パルミタ・蒲鉾・大根卸

S.e M. 16 (K Y 商店) 白米・砂糖・麦粉・醤油・肉・素麺・味の素

S.e M. 17 (K G 商店) 白米

d. 衣料品店

衣料店 1 (I U店) 衣服・着物

衣料店 2 (S E店) 反物・着物

衣料店 3 (M N店) 布類・毛布・花輪・靴・ランブ

衣料店 4 (Y M店) 洋服・綿

衣料店 5 (G J店) カミザ・ズボン・靴下・着物・反物・サイヤ・毛布・靴等

衣料店 6 (S D店) 糸

衣料店 7 (O G店)

衣料店 8 (K S店) 糸・ボタン

e. 農業資材商

農業資材商 1 (K Y商) バタチーニャ種・1953 年白米 5 俵購入

農業資材商 2 (M Y商) 綿花運送 (運送業 1945 年には地元のヴィラに居住)

農業資材商 3 (S I 商) 落花生種

農業資材商 4 (H M商) 農薬・油虫殺し

農業資材商 5 (S S 商) 消毒薬ソナト

農業資材商 6 (A Y商) 野菜種 (大根・ふだん草・にんじん・なすび等)

農業資材商 7 (T U商) バタタ消毒薬

f. 薬局・医師等

薬局 1 (U D薬局) ビタミン・脱脂綿・絆創膏・胃腸薬・肝臓薬・わかもと・注射薬・救心・六神丸

薬局 2 (C P薬局) カルビズマ・肝臓薬・六神丸等

歯科 1 (H G歯科) 歯科

医師 1 (G J 医師) ラジウム治療

鍼灸 1 (I T鍼灸) 鍼灸・按摩

鍼灸 2 (T G鍼灸) 鍼灸・マッサージ

理髪 1 (N S理髪) 髪結い

所在地が地元のヴィラのもの：

bar 5 (T T商店) ポン

S.e M.18 (H G商店) 煙草・魚・フェイジョン豆

S.e M.19 (G J商店) 白米・砂糖・弱魚

S.e M.20 (Y N商店)*****煙草・ピング・ポン・弱魚・チーズ・素麺・缶詰

S.e M.21 (S T商店) 煙草・リマ・小豆・醬油・素麺・肉・ソーダ・虫殺・ホヤ・カミザ・綿種

薬局3 (E G薬局) 目薬

助産婦1 (N J) 助産(村内の人)

理髪1 (J M理髪) 理髪

行商人1 (M C) 万年筆

上に列挙した商店について、*印に従って幾分の注記をしよう。

* ここでいう旅館とは日系人経営のものであり、宿泊を提供するとともに、日本食の食堂を経営している。もちろんホテルといってよい。2つあり、共に鉄道駅に近いところに立地する。移民社会では、このような旅館は多くの同国人の移民の拠点の役割をする。他地方からの同国人の旅行者が利用することはもちろんであるが、日常的には、周辺の農村部に居住している住民が、徒歩や馬車で都市に出てきた場合、また鉄道で遠距離旅行に出る場合、宿泊、食事に利用する。同時に、さまざまな社会・経済情報の交換場所として重要な役割を果たし、また新来者に対してのさまざまな便宜の供与を図る。「Y日記」の記録によれば、1951年にYは、土地代の手付け金の支払いの代行を依頼している。

** バール bar とは、道路に面して開かれた簡易立ち飲み立ち食い店である。煙草やパンや Pasta のような軽食、コーヒーや果物ジュースなども販売する。日常的に小さなカップのコーヒ(カフェジニョ)を立ち飲みしながら、立ち話を楽しむ場所となる。これも日常的情報交換の場としての役割を果たす。bar 3 (Y S 商店) は、Y が昭和 20 (1945) 年に「御真影」を購入した店であり、昭和 28 (1953)・昭和 30 (1955) 年に、この店を通じて『中外新聞』を定期購入している。このことが示すように、このような情報伝達の核になる商店は、また、日本語新聞のような日本人社会の情報のメディア伝達の結節点ともなる。

*** セッコス・イ・モリャードス=secos e molhados (S.e M. と略記) とは、食料・雑貨店のことである。日常的な食料品、日用品、農業用具等何でも取り扱ういわゆる雑貨屋である。ブラジルの食品ばかりでなく、日本移

民向けには、白米・素麺・醤油・味の素など日本風食品を取り揃えているところに特色がある。また店によっては、わかもと・救心といった日本からの輸入薬品なども取り扱っている。

また、S.e M.5 (YO 商店) に見られるように日本への送金の代行など、日本移民への便宜の供与を行う機関ともなっている。

**** S.e M.7 (TY 商店) は Y の妻の叔父の店で、もとトラック運送業を営んでいたが、家族が昭和 22 (1947) 年にプルデンテ市に商店を開いた。運輸業から商店を兼業している例である。

***** S.e M.8 (HI 商店) は、HI 兄弟商会という。この店は昭和 25 (1950) 年『輝号 (2610 年新年号)』の取次店であり、日本人社会内の情報伝達の役割を担っている。

***** S.e M.14 (GJ 商店)、衣料店 5 (GJ 店)、S.e M.19 (GJ 商店) は外人店と記録されているが、これは非日系人経営の店を示している。衣料店 5 の正式の名称は、Casa Caprichosa, Benjamin L. F. Ternury. であり、布地 tecidos, 小間物 armarinhos, 履物類 calçados 取り扱いの店である。「Y 日記」に記された非日系人経営の店は 3 軒である。逆にいえば、S.e M.10 (IU 商店) は Casa Nipo de K.I. (K.I. 日本店) というブラジル名を名のり、積極的に日本人の顧客を集めている。

***** S.e M.20 (YN 商店) は、「ミネのムラ」の地元のヴィラにある商店である。したがって、顧客は地元に限られているが、それだけに徹底して地元密着型の経営を行っている。日本語学校用の教科書や文房具ばかりでなく、学校費の代理受け取りの窓口にもなり、昭和 26 (1951) 年に日本から天勝一座が興業にやって来たときの入場券の販売店にもなっているし、昭和 25 (1950) 年の雑誌『輝号 (2610 年新年号)』の取次ぎをしたり、『サンパウロ新聞』取次店を積極的に引き受けている。また、日系農家で働くアメイヤ (請負農) やカマラーダ (日雇い労働者) が煙草やピンガ (粗製ラム酒) 等を「付け」で購入することを認め、それを日系農家に請求することを許されている店でもある。

米などの穀物類、また一般食料品の購入には、一部かけ売りが行われていることも記録から読み取ることができる。

Y 家族のこれらの商店の利用傾向を年次別に追った表が第 12 表である。

第 12 表 Y 家族の利用店の年次別変化

昭和 20-30 (1945-55) 隔年

プレジデンテ・ブルデンテ市内のもの：

業種・番号	店 名	利 用 年 (1945-55 年)					
旅館 1	T D 旅館	45					
旅館 2	T F 旅館	45	47	49	51		
bar 1	A K 商店	45					
bar 2	W N 商店	45					
bar 3	Y S 商店	45	47	49	51	53	55
bar 4	S D 商店	45	47	49	51	53	55
S.e M. 1	Y M 商店	45					
S.e M. 2	S J 商店	45					
S.e M. 3	H T 商店	45					
S.e M. 4	T D 商店	45					
S.e M. 5	Y O 商店	45	47	49	51		
S.e M. 6	M U 商店	45	47	49	51		
S.e M. 7	T Y 商店	45	47	49	51		
S.e M. 8	H I 商店	45	47	49	51	53	
S.e M. 9	M K 商店			49			
S.e M. 10	I U 商店			49	51	53	55
S.e M. 11	T T 商店			49	51	53	55
S.e M. 12	M M 商店				51		
S.e M. 13	N M 商店				51		
S.e M. 14	G J 商店				51		
S.e M. 15	K H 商店				51	53	
S.e M. 16	K Y 商店				51	53	55
S.e M. 17	K G 商店					53	
衣料店 1	I U 店	45					
衣料店 2	S E 店	45	47				
衣料店 3	M N 店	45	47	49			
衣料店 4	Y M 店		47	49	51		
衣料店 5	G J 店			49	51		
衣料店 6	S D 店				51		
衣料店 7	O G 店					53	
衣料店 8	K S 店	45					
農業資材商 1	K Y 商	45	47	49	51	53	
農業資材商 2	M Y 商	45			51		
農業資材商 3	S I 商		47		51		
農業資材商 4	H M 商				51		
農業資材商 5	S S 商						55
農業資材商 6	A Y 商						55
農業資材商 7	T U 商						55
薬局 1	U D 薬局		47	49	51	53	55
薬局 2	C P 薬局				51	53	55
歯科 1	S G 歯科			49	51	53	55
医師 1	G J 医師				51		
鍼灸 1	I T 灸				51		55
鍼灸 2	T C 灸						55
鍼理 1	N S 理髪						55

地元のヴィラのもの：

業種・番号	店 名	利用年（1945-55 年）					
bar 5	T T 店	45	?		51		
S.e M.18	H G 店		?				
S.e M.19	外人店		?	49			
S.e M.20	Y N 商店		?	49	51	53	55
S.e M.21	S T 商店				51	53	
薬 局 3	E G 薬局						55
助産婦 1	N J				51		
理 髪 2	J M 理髪	47		49			
行商人 1	M C				51		

第 12 表からは、次のような事がらを読み取れるだろう。

まず、旅館の利用が昭和 26（1951）年以降はなくなる。それは、一つには、プルデンテ市に出るバスやトモベ（アウトモーベル＝自動車）などの交通手段が整備され、都市における宿泊を必要としなくなったという点が挙げられるが、同時にバス（ジャルジネイロ）に比べて、運賃がその 5 倍近いトモベを利用できるだけの Y の経済的上昇が見られたことである。また、旅館が持っていた情報の結節点としての役割を、Y 自身が多く必要としなくなった、または、他の機関、例えば、bar 3（YS 商店）や S.e M.5（YO 商店）、S.e M.8（HI 商店）、S.e M.10（IU 商店）といった特定の bar や S.e M. がその機能を代行するようになった点も挙げられよう。

プレジデンテ・プルデンテ市における bar の利用は、商品の品数だけでなく、便宜の供与を含めた人間関係によって、ほとんど bar 3（YS 商店）と bar 4（SD 商店）との 2 軒に収斂する。また、S.e M. の利用の頻度の増大は、商品の品数が優先し、その結果プレジデンテ・プルデンテ市内にあっては後発の S.e M.16（KY 商店）が顧客を集め、Y についていえば、昭和 30（1955）年には、S.e M.16（KY 商店）の利用の頻度がもっとも高くなる。地元ヴィラについていえば、前述のような便宜の供与を積極的に進めた S.e M.20（YN 商店）が顧客を集め、Y についていえば、昭和 28（1953）年以来は、ほとんどが YN 商店に集中した。

農業資材の購入については、特に目立つ点は、農業資材商 6（AY 商）からの、大根・ふだん草・にんじん・なすび等、葉菜や根菜、果菜の野菜種子の購入の増加である。日本においては、農家であるかぎりは、米（稲）、大麦、小麦などの主穀をはじめ食糧を自家栽培することは普通のことと考えられよう

が、もともと綿作という商品生産から始まったこの地域の農家では、前記の資料を見るとおり、ポン（パン）はもちろんのこと麦粉、フェイジョン豆の他、日本の食料ということで米、素麺、小豆、その他味噌、醤油、味の素などの調味料はもっぱら購入によっている。日本からの輸入品である味の素を除けば、それらはすべて、サンパウロ州を中心とするブラジルの東南部・南部にローカルな市場を形成している。生鮮野菜である大根・ふだん草・にんじん・なすび等は生鮮性を必要とするが故に広い市場を形成しにくい。しかし、野菜を自家栽培するには、土地利用の方法、労働の配分からして、りん酸肥料を多投する綿作の単一栽培はなじまなかった。したがって、比較的市場の広い大根やにんじんのような根菜類を購入によって入手していた。しかし、ジャガイモ（バタータ）を中心とする複合的栽培に転換するようになって、野菜は自家栽培で賄うようになり、その結果、野菜種の購入が目立つようになったと考えられる。

全体としていえば、日常的食料や生活資材の購入は、地元のヴィラの商店を特定化しながら、それとの関わりを一層強めている。他方、プレジデンテ・ブルデンテ市内の bar や S.e M. の利用については商店の特定化が進んでいる。それと同時に病院や薬局、歯科医、鍼灸、理髪といった緊急のまたは日常的な、衛生・健康管理部門のサービスを都市に求める傾向が増大していることが示されている。

(8) 社会集団の特性（「ミネのムラ」の人間関係）

——「Y 日記」から読み取れる「ミネのムラ」の特性——

ブラジルにおける Y の家族を支えた様々な人間関係は、Y 一家の生活の中から歴史的に形成されたことはいうまでもない。

Y 一家のブラジル移住とその後のトレイルについては、すでに記述した¹⁾が、それは経済活動を中心にしたものであった。そこで、経済活動のみならず、それに社会的人間関係をつけ加えた Y の家族のライフヒストリーを再述する。

① 「ミネのムラ」に定着までの人間関係

現在の戸主（YS）は、明治 44（1911）年、YK の長男として福岡県浮羽郡 T 村に生まれた。昭和 4（1929）年、18 才の時、父 YK、母 YM に伴われ

て、兄弟2人(YT, YK) 姉妹2人(YA, YF) と共にブラジルに渡った。

渡伯後すぐに、パウリスタ線ピラチニングア Piratininga に近い、ブラジル人所有のヴィアド耕地 Fazenda Viado にコーヒーの樹の監理をする1年契約のコロノとして入植した。このヴィアド耕地には、1910年の第2回日本移民(旅順丸移民)の際、福岡県出身者12家族、44人が集団的にコロノとして入植した耕地であり、Y一家がこの耕地に入植したのは、出身村の人間関係によったことはいうまでもない。一家は、親子で6,000本のコーヒー樹の監理を請け負った。

昭和5(1930)年、Y一家は奥ソロカバナ線のマルチノポリス Martinopolis に新しく土地を購入した先行移民の知人(IT)の耕地に移り、4年契約のコーヒー樹のフォルマドールとして入植し、4,000本のコーヒー樹の新植を請け負った。その間、樹と樹との間の空閑地に作付けをする権利(間作権 *com-planta*)を得て、フェイジョン、ミーリョ(とうもろこし)を1列当たり2〜3筋播き、その収穫も収入となった。

契約を終え、昭和8(1933)年に、二人の先行日本移民(KIとKN)が経営するのコーヒー耕地に2年間勤めたが、コーヒーの価格は下落する一方であったので、コーヒー耕地の労働に見切りをつけ、1935年に、同じ奥ソロカバナ線のアニューマス Anhumas の街から7kmのところの耕地を購入し、自作農として入植した。この耕地は、コーヒー園15アルケイレ、パスト(牧地)3アルケイレ、その他2アルケイレ、総計20アルケイレ(約48ヘクタール)で、コーヒー園には、霜でやられて枯れかけた4年もののコーヒー樹13,000本が植わっていた。購入価格は5コントであった。

この土地の購入資金5コントは、昭和10(1935)年6月、6.3コントを先行の日本移民者で綿花の現地仲買を営む小商人になっていたSYから2年契約月利1歩5厘の単利で借入して、その中から調達した。月利1歩5厘の単利はこの地域で特に高いものではなかった。移住してからの日も浅く、ブラジル社会でまだ十分な信用を獲得していないY一家にとっては、このような資金供与は天恵にも等しいものであったが、SYにとっては自己の集荷圏内に生産者を確保しておくことは必要であったので、この資金の調達は必ずしも恩恵による便宜の供与というものではなかった。

この頃はコーヒーの価格が悪く、綿花の価格が最も良い時であった。主作は綿作とし、綿作を8アルケイレずつ12年間連作し続け、その結果、土地が痩せ

た。

土地購入の借金は、まず2年後に利息2.23 コント余を支払った。しかし元金の返済までには至らず、元金の返済を1年間延長した。この時、また他の先行の日本人移住者のSIより2コントの借入をした。その際、同じく先行の日本人移住者Haに借入金の一部の保証人となってもらっている。投機的性格が強い綿花の商品生産者の借入金の裏書きをするということは、強い信頼関係を必要とするが、Haは特に同郷といった関係にはなかった。Y一家は、その信頼に応じて、それらの借入金を昭和14(1939)年までに支払い終え、完全に自作農化した²⁾。

第二次世界大戦の勃発でハッカ景気が始まり、ハッカの価格が暴騰したので、Y一家も昭和17(1942)年からハッカの栽培に手をつけ、翌1943年には自己資金でハッカの蒸留装置まで設備した。価格は、低い時で1キロ当たり250 ミルレイス、高いときで400 ミルレイスになった。ハッカの生産量はアルケイレ当たり200 kgであったから、アルケイレ当たりの粗収入は、50~80 コントにもなった。ハッカの生産に対しては、ブラジル銀行 Banco do Brasil が高額の融資をして景気を煽ることになったが、3年目の昭和19(1944)年に価格は1キロ当たり80 ミルレイスにまで大暴落した。銀行から借金をしてやった者は借金を残して困った者が多かったが、Y一家は自己資金で賄えるほどの規模でやっていたので、打撃は少なかった。

この間、昭和17(1942)年に、長男であった現在の戸主YSは、アニューマス在住の先行移住者で、日本での出身地が同じ福岡県浮羽郡で、ほぼ同郷のK村出身の家族MCの息女F子と結婚し、YSは31歳で一家をなし、独立の道に進んだ。この時、M家との間に親族関係が成立した。

アニューマスの土地がやせたので、YSは、昭和22(1947)年、新しい土地を求めて「ミネのムラ」にやってきた。昭和23(1948)年、「ミネのムラ」でスペイン人から土地9アルケイレを総計95コントで入手する契約が成立した。その年、前住地のアニューマスの土地の売買契約が、別のスペイン系ブラジル人との間に成立し、その販売代金45コントを入手した。このアニューマスの土地の販売代金を、諸雑費を含めた「ミネのムラ」の土地購入費100コント余の支払いの一部に当て、翌昭和24(1949)年までに、土地代金の支払いを完了した。父のもとに家族の一員としてブラジルに移住してきた長男のYSは、38歳でここで完全に独立を遂げた。

そして昭和 23 (1948) 年には、弟の YT も「ミネのムラ」に來住し、父は第一線から引退した。

昭和 25 (1950) 年には、その弟 (1921 年生) も、シンコムルアルケイレに在住していた同郷の福岡県浮羽郡 T 村出身の SY 家の息女 Y 子と結婚し、独立した。

「ミネのムラ」では、2 年目まで綿を栽培したが、3 年目からは投機的な綿の単作をやめて、バタータ batata (じゃがいも) とアメンドイン amendoïn (落花生) を主作物とし、それに飼料用のとうもろこしとパスト (牧草地) を組み合わせて、より土地利用度の高い複合経営を始めた。

自作農化への道を進むにあたって、当時の薄荷、綿花、落花生等の価格の好調に支えられたとはいえ、資金の調達を完全に計画的な自己資金によっている点は注目に値する。ただし、土地売買の手続きなどの便益は独力で行うことなく、日系の HD 土地登記事務所に負っている。移民社会においては、ホスト社会に対する言語的制約が働き、また初めは十分な信用もなく、銀行のような公的機関からの資金を確保することも困難であるため、社会経済的上昇や独立の過程にあっては、まず日本人集団内部で、信用や資金や社会的相互扶助の関係を結び結ぶのは普通のことであろう。したがって、この際、土地登記の事務を日系の土地登記事務所に依頼したのは当然のことであった。

- 1) 「『Y 日記』から見たサンパウロ州の日系農業小生産者の生産と生活(1)」『法政大学教養部紀要』第 79 号, 1991・2, pp.7-10.
- 2) 「『Y 日記』から見たサンパウロ州の日系農業小生産者の生産と生活(2)」『法政大学教養部紀要』第 83 号, 1992・2, pp.5-6.

② 「ミネのムラ」での初期の社会的相互扶助関係

海外への移住先の生活で、大きい困難の一つが家族の病気である。それ自体が家族にとっての不幸であるだけでなく、家族労働に依拠する割合の高い独立自営農民にとっては、家族労働力の欠落と経済的負担の増大という二重の意味で大事件となる。それが経済的独立といった上昇期に起こったとしても、その家計や経営に及ぼす影響は計り知れない。

一見、順風満帆に見える Y 一家の場合でも、「Y 日記」の記録によると、幾度かの危機があったことが分かる。

次のような記録がある。

昭和 21 (1946) 年 5 月 4 日

母 M の病気の入費 プルデンテ医者呼ぶ

一、金 参百五拾阡レス也 トモベ (引用者註：アウトモーベル=自動車) 代払い

一、金 百拾阡レス也 母薬代払い

昭和 21 (1946) 年 9 月 20 日

母 M・弟 K プルデンテ医者行き

一、金壹コト五百阡レス也 弟 K 相渡し

一、金 五百阡レス也 母 相渡し

内 金壹コト阡レス也 同月 23 日 弟 K より 父受取り

昭和 21 (1946) 年 11 月 28 日

この記録には、「妻 F 子病気に付き御見舞い」として、その後に KG, ST 他 21 名の名前が連記されている。この 23 名の Y との社会的関係については、後に述べる。記録を続けよう。

昭和 21 (1946) 年 12 月 14 日

妻 F 子病気に付き サンパウロ市行き

F 子の父より借用

一、金五コト阡レス也 S 夫受取

昭和 21 (1946) 年 12 月 25 日

アニューマス 伯父 T Y 氏より 借用主 父 K

一、F 子病氣時 サンパウロ市病院行き S 夫

一、金式コト阡レス也 前分 弟 K 受取

一、金式コト阡レス也 後分 T 夫 受取

合計 一、金四コト阡レス也 父 K 借用

二回目 一、金六コト阡レス也 S 夫 受取 サンパウロ市行き

外に 一、金壹コト阡レス也 父 K 受取

合計 一. 金拾壱コント阡レス也 借用

昭和 22 (1947) 年 2 月 11 日

F 子の父 M 氏より借用

一. 金五コント阡レス也

F 子の母 Y 子様より S 夫へ サンパウロ送金

昭和 22 (1947) 年 4 月 18 日

2 回目 S 夫行き

一. 金貳コント阡レス也 S 夫借用

昭和 23 (1948) 年 9 月 10 日

妻 F 子病気

一回目 一. 金壱コント七百五十阡レス也 S 夫相渡し

二回目 一. 金壱コント六百五十阡レス也 S 夫相渡し

三回目 一. 金壱コント二百五十阡レス也 S 夫相渡し

腫物手術サンパウロ市行き F 子の父見舞い

一. 金貳コント阡レス也 F 子相渡し

一. 金三百阡レス也 その他 F 子の父見舞い金

昭和 23 (1948) 年

この年からは、同年 6 月の記録にあるように、これらの借入金は返済され出している。

昭和 23 (1948) 年 6 月下記借入金全部支払い済

一. 金六コント阡レス也 F 子の父よりの借入金全部支払い

一. 金七コント五百阡レス也 プルデンテ市 HG 氏より借入金

一. 金貳コント阡レス也 HT 氏より借入金

一. 金壱コント阡レス也 SM 氏より借入金

昭和 23 (1948) 年 12 月 15 日 一. 金壱コント阡レス也 SM より父借用

その外正月 10 日 一. 金 五百阡レス也

- 計 一、金壱コント五百阡レス也 借用
 一、金壱コント阡レス也 NJ より借用

昭和 24 (1949) 年 8 月 28 日支払い

昭和 26 (1951) 年になって、妻が病気でサンパウロの病院に入院した際に、昭和 21 (1946) 年 12 月 25 日付でアニューマス在住の伯父 TY 氏より借入した高額の借入金の返済を終えている。その記録は次のとおりである。

昭和 26 (1951) 年 7 月の記録

昭和 22 (1947) 年 7 月 28 日

- 一、金 五コント阡レス也 伯父 TT に相渡し

昭和 23 (1948) 年 8 月 14 日

- 一、金 五コント阡レス也 父より TT に返済相渡し

昭和 25 (1950) 年 8 月 14 日

- 一、金 参コント阡レス也 T 夫より TT に返済相渡し

昭和 26 (1951) 年 7 月 13 日

- 一、金 参コント阡レス也 父より伯父 TY に相渡し

合計 一、金拾壱コント阡レス也 全部支払い済

その他一、金 壱コント阡レス也 利息として北パラナ行き TY 氏に餞別相渡し

ところで、昭和 21 (1946) 年 11 月 28 日の「妻 F 子病気に付き御見舞い」の記録に続いて連記された 23 名について触れておこう。発起人の二人についての関係は明らかではない。KG 氏はプレジデnte・プルデnte市在住、ST 氏はランチャリアに在住とだけ知れているが、親族に当たるのか、友人であるのかが不明である。ただし、KG 姓の人は、23 名中 4 名いる。アニューマス在住の MR 氏は F 子の兄である。同じアニューマス在住の TY 氏と TT 氏は伯父に当たり、入院に当たって多額の金を融通くれた人物であることは、上記のとおりである。プレジデnte・プルデnte市とマルチノポリスの 2 名の NG 氏も叔父に当たる。3 名の IM 氏は、Y がマルチノポリスで就業していた時の耕主の一族である。残る 10 名のうち、TF 氏は前出のプルデnte市内の旅館主であり、YS 氏は市内の S.e M. の店主であり、UD 氏は薬局店主である。

他の7名中、2人のAN氏は周辺のヴィラの一つであるレボージョの住人であることが知れるが、残る5名は不明である。

しかし、ここで明記してもよいことは、家族の社会的困難や危機に際して、ホスト社会の福祉や扶助に期待できない日本人移民集団で、相互扶助を支えるのはまずは親族の関係であることが明らかになっていることである。さらに付け加えれば、先行移民のうち、日本人社会のネットワークを取り結ぶと考えられる旅館主・商店主が、さらに、ブラジルでいうところの苦楽を共にしたアミーゴ（友人）がこれらに加わるだろう。

ここで論ずる点とは直接関わりのないことではあるが、異国に住む移民の心情を表すものなのか、はたまた、穏やかで豊かな感性を持ったYの人柄を彷彿とさせる記録が、この困難期に残されているので、ここに記しておく。

昭和二十二年五月二十日午前九時二十分

世界日食

始めが午前九時十分より二十五分頃は前よりも全分ママ消え回りばかりの光線なり

皆既日食はブラジル（ミナス）が元と云うこと

（以下次号）